



蛭沼寿雄『新約本文のパピルス』第Ⅲ巻発刊に向けて

辻 学

「未完の最終巻、発刊へ」——。本年9月22日付け『朝日新聞』阪神版の紙面に大きく記されたこのタイトルと、その左側にある蛭沼寿雄先生の写真を見て、思わず目頭が熱くなった。2001年2月に先生が亡くなられてから8年半あまり。遺品の中から出てきた原稿が、こうして陽の目を見ることになるとは。この喜びをどう表現してよいかわからないほどである。

蛭沼先生のライフワークとも言うべき『新約本文のパピルス』、未完のままになっていた第Ⅲ巻がもうすぐ刊行にこぎ着けようとしている。編集に携わった者として、僭越ではあるが、この書物の意義、刊行までの経緯などについて、ご尽力下さった方々への感謝と個人的な感慨も交えつつ述べることを許していただきたい。

蛭沼寿雄先生（関西学院大学名誉教授）は、1949年から1982年まで文学部に奉職された（関西学院への就職は1946年）。英文学科の所属で、主に言語学を講じておられたが、先生には言語学と並んでもう一つ、新約聖書の本文研究という専門があった。言語学については、私は門外漢なので、詳細な紹介は控えたいが、本文研究については、間違いなく、世界レベルの学者として学院史にその名を記されるべき存在である（なお、先生のご経歴・業績については、土居敏雄氏〔豊橋科学技術大学名誉教授〕による丁寧な紹介を参照していただきたい。『蛭沼寿雄教授還暦記念論文集』〔大阪言語研究会・日本ケルト研究会発行、1976年、xiii-xviii頁〕に掲載されたものだが、インターネットで閲覧可能である〔<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kamiyama/Hirunuma.html>〕）。

* * * * *

学院史編纂室の池田裕子さんから、蛭沼寿雄先生の『新約本文のパピルス』（以下『パピルス』と略記）第Ⅲ巻について問い合わせを受けたのは、今年の初めである。先生が亡くなられた後しばらくして、『パピルス』Ⅰ・Ⅱ巻の在庫と共に、原稿やゲラと思しき物が大量に入ったダンボール箱を預かった。その中に第Ⅲ巻のゲラ刷りがあることは、預かった際に一度確認していたのだが、関西学院に在る間はあまりの忙しさで手が回らず、手つかずのままであった。そして、2007年3月に広島大学へ移った後は、このことをすっかり失念していたのである。池田さんからの問い合わせがなければ、原稿を埋もれさせるという、とんでもない失態を犯すところであった。

問い合わせを受けて久しぶりに開いた箱の中から、『パピルス』第Ⅲ巻の前半部分のゲラに加え、後半部分の手書き原稿が出て来た時は、興奮を抑えきれなかった。慌てて池田さんに連絡し、同時に、第Ⅲ巻の原稿が全部揃っているかのチェックに入った。刊行に向けての準備がこの時始まったのである。関西学院を離れて広島にいる自分だけでは到底進められない作業なのは明らかだった。幸いなことに、学院史編纂室室長の永田雄次郎文学部教授、そして経済学部の上塚智教授、（蛭沼先生のお弟子さんでもある）教育学部の山本伸也教授、さらに同じ新約聖書学者である人間福祉学部宗教主事の嶺重淑准教授が全面協力して下さることになり、第Ⅲ巻刊行委員会を組織することができた。とくに学院史編纂室が、『パピルス』を学院史における貴重な業績として評価して下さったことには心から感謝している。

* * * * *

刊行までの過程を辿る前に、この本の意義について若干述べておきたい。

我々が日頃よく目にする新約聖書、実は原本は存在しない。新約聖書の原典はギリシャ語で書

かれているが、現存しているのはすべて手書き写本、つまりコピーである。今日まで伝わっているのは、パピルスに書かれた写本が 126、羊皮紙（実際には、羊の皮以外にも用いられた）に大文字で書かれた写本が 320 で、小文字で書かれた写本に至っては 2,898 もの数が残されている（ドイツ・ミュンスター大学の新約本文学研究所が公開しているリスト <http://www.uni-muenster.de/NTTextforschung/> による。大文字写本の方が古く、小文字写本は 9 世紀以降に主流となる。年代が新しいものほど、当然ながら残る数は多い）。

問題は、写本間で本文が相違している場合が非常に多いということである。手書きで写すため、意識的・無意識的な改変、脱落、付加が頻繁に生じる。そこで、写本を相互に比較検討し、どれがオリジナルの本文であるかを推定する作業（「校合」という）が必要となる。その作業の結果、原本ではこう書かれていた、と推定される本文を復元した「校訂本」が出来上がる。私たちが手にする日本語聖書は、この校訂本に基づいて翻訳されているのである。これを「本文研究」と呼び（「正文批判」「本文批評」という名称もある）、手書き写本で伝承されている文献であれば、程度の差はあれ必要なものだが、新約聖書の場合は、写本の数が膨大なので、その分、本文研究も新約聖書において高度に発達することになった。

数多くの写本を調べ、系統立てて整理していくこの作業がいかにか時間と根気を要するものであるかは、容易に想像がつく。現在では、一人で写本全部を相手にすることは不可能なので（上記のギリシャ語写本に加えて、ラテン語、シリア語、コプト語などの写本、さらに教会教父の引用や聖句集での引用も考慮せねばならない）、研究所（代表的なものがドイツ・ミュンスター大学にある）において共同して、世界の研究者の協力も受けながら作業は進められている。

写本の中では、羊皮紙に書かれた大文字写本が、書かれた年代も比較的早く、より良い（＝オリジナルに近い）「読み」を伝えている場合が多い。さらに、羊皮紙はパピルスよりも保存状態が良い。そこで、原本の復元作業は、羊皮紙の大文字写本、とりわけ新約聖書の大部分を保存しているヴァチカン写本とシナイ写本（いずれも 4 世紀のものと考えられている）を軸にしてなされることになる。

しかし、総じて年代がより古いのは、パピルス写本の方である。最古の新約写本とされるパピルス 52 番は 2 世紀はじめ頃のものだし、他にも 3 世紀に遡るパピルス写本は数多い。パピルスは湿気に弱いので、保存されているパピルス写本は断片的なものが多いのだが、古い時代の本文を伝えているゆえに、原本の復元作業には欠かせないのである。

ところが、パピルス写本についての情報は、有名なパピルス（オクシリニコス・パピルス、チェスター・ビーティ・パピルス、ボドメール・パピルスなど）を除けば、雑誌などで個別に公開されるだけで、パピルス写本全体をまとめて調べるには不便極まりない。この、研究上の欠点を補い、本文研究の飛躍的な進展に貢献しようとしたのが、蛭沼先生の企画した『新約本文のパピルス』だったのである。

『新約本文のパピルス』は、パピルス 1 番から順を追って、可能な限りパピルスの写真版も加えつつ、その本文を転記し、1 語 1 語について他の写本と比較検討していくという、壮大な企画である。第 I 巻の「序」に先生が記しているように、「恐らく、本邦には勿論のこと、欧米にも、



この種のもは極めて稀で、もしかすると皆無に近いのではないであろうか」。新約パピルス全てについて参照できるこのような書物をまとめることは、蛭沼先生ほどの学識と情熱があつて初めて可能なことだったのである。先生は、これが国際的な貢献でもあることを自覚していたので、説明を可能な限り英語でも加えている（特に第Ⅱ巻はそうである）。したがって、日本語を解さない読者でもこの本を利用することができる。実際、海外の研究者から『パピルス』への賛辞が数多く寄せられた。

* * * * *

このように書くと、まるで私自身もこの分野に通じているかのようだが、実際には、本文研究の成果である校訂本を利用させていただく立場に過ぎない。比較検討の資料を見て、どの写本がより古い本文を示しているかを判断する程度のことは、たいていの新約聖書学者がやっているし、場合によっては自分で写本そのもの（の写真版）を見ることもある。しかし、写本の実物を自分で見て、そこに記された本文を読み取り、それが他の写本とどう異なっているか比較検討し、どの系統の読み方に属しているかを判断するという作業は、地道だが、古文書学の知識も必要とされる、まさにプロの仕事であり、写本の読み方に通じた専門家でなければ、おいそれと真似できるものではない。

私は、関西学院で過ごした大学院生時代、蛭沼先生が定年後に神学研究科で開講しておられた「新約原典研究」に都合4年半も出席していながら、ついに写本研究の技術を教わらなかったことを激しく後悔している。蛭沼先生にギリシャ語聖書の読み方を習うという、長い神学部・神学研究科の歴史の中でも限られた人間しか浴することのできなかつた恩恵を（古い神学部卒業生からは、蛭沼先生に習う機会を与えられなかつたことを悔やむ声が複数あがっている）、活かすことができなかつたのである。

蛭沼先生の教えを受け、その学統を継ぐのは皆、言語学関係の研究者である。蛭沼先生の本文研究を受け継ぐ人間はついに現れなかつた。新約聖書研究という専門からして、自分は非常に近い位置にいたと思うのだが、授業で接したそのレベルの高さに尻込みしてしまったことをよく覚えている。ギリシャ語やヘブライ語、ラテン語は当然のこと、印欧語に広く通じた先生の原典講読は、神学部で数年ギリシャ語を学んだ程度の大学院生にとって、山の高嶺を見上げるような感があつた。あの時、勇気をふりしぼって本文研究の教えを乞うておくべきだつたのだと、残念でならない。

* * * * *



言語学の方では優秀な後継者に恵まれた先生も、本文研究においては孤高を保つこととなつた。それは関西学院大学においてもみならず、日本の学界においても同様であつた。蛭沼先生は、日本で初めての、そしてほとんど唯一の新約本文学者であつたが、それは先生が亡くなつた今でもそうなのである。

そのため、先生のご研究は国内では広く知られるところとはならなかつた。『キリスト教人名辞典』や『日本キリスト教歴史大事典』のような、日本の著名なキリスト教研究者を紹介している

【言語学の教え子と-1986-】

文献でも、先生の項目は見当たらない。それは、自己主張や目立つことを嫌う先生のご性格によることも大きいのだが、いかに本文研究という分野の重要性を、日本のキリスト教界が理解していなかつたかということのしるしでもある。

先生は、写本研究の成果を、雑誌『新約研究』 (*Studia Textus Novi Testamenti*) に掲載し続けた。この月刊誌は、先生が個人で発行していた、まさに知る人ぞ知る専門誌なのだが、それだけに広く注目を集めるには至らなかつた（関西学院大学がこの雑誌を全く所蔵していないのは不思議である。

立教大学、東京神学大学、同志社大学といったキリスト教研究の有名校には、1号から最終の300号まで揃っている)。

先生のお名前はむしろ海外において知られていた。英米の本文学者たちが協力した「国際ギリシャ語新約本文計画」が、新約聖書の写本研究の成果を、*The New Testament in Greek* という叢書として公刊しているが、その第1号(ルカ福音書1-12章、1984年)に掲載された、協力者リストの中には蛭沼先生のお名前が出てくる。また、上述した『蛭沼寿雄教授還暦記念論文集』の *Tabula Gratulatoria* には、海外の言語学者たちと並んで、Kurt Aland (Münster, Deutschland)、Matthew Black (St. Andrews, Scotland)、Bruce M. Metzger (Princeton, USA) といった、本文研究の世界的学者たちも名を連ねて祝意を表している(ちなみに、この記念論文集には、1975年6月に関西学院大学で開催された日本言語学会第70回大会で公開講演をしている先生の写真が掲載されている。この講演「プリ・イタリア諸言語の位置」については、先生の文集『同道精進』[1994年、非売品] 39-43頁に詳しいいきさつが記されている)。新約本文に対する先生の地道な研究成果は、国内ではほとんど顧みられることがなかったが、海外では高い評価を得ていたのである。

* * * * *

『パピルス』は、蛭沼先生の永年にわたる地道な取り組みが結実したものである。原稿の大半は、上述の『新約研究』誌に一度公表したものを書き改める形で作られているが(その徹底した改稿ぶりには本当に驚かされる。朱の入れ方が半端ではないので、今回の作業においても、解読に頭を悩ますことが何度もあった)、1994年に刊行された第I巻(パピルス1番から45番までを収録)の下地となった原稿が最初に『新約研究』誌に掲載されたのは、1975年3月であった(第103号、パピルス1番)。その間ほぼ20年。もちろん研究はそれ以前から始まっている(実は、『新約研究』に掲載された最初のパピルスは67番で、およそ40年近く前、1971年2月に発行された第54号に載っている)。驚くべき意志の強さをもって先生はこの仕事を——少なくとも第II巻まで——完成に導いたのである。

人文学の研究とはかくも息長く、地道に積み重ねられて初めて花開くものであるという、まさにお手本のような話である。短い期間で「成果」を求め、「有用な」研究に優先的に資金を提供するような昨今の風潮からは決して生まれることのない、真の研究をここに見る思いがするのは私だけではないであろう。写本に記された文字一つ一つと誠実に向き合い、時間をかけて解読し、他の写本と比較しながら、その写本の性格を読み取っていく。何十年にもわたるその地道な作業を正しく評価できるような仕組みを、現代日本の大学は果たして持っているだろうか。

* * * * *

『パピルス』の仕事を蛭沼先生は、余人の真似できない水準で貫徹した。第I巻はパピルス1番から45番を収録しているが、先生は可能な限り、パピルスの実物を実際に調査した上で記述を行なっている。実物を調べたものについては、その旨が記されており、その数は第I巻全体の4分の1以上にもなる。調査のため先生が赴いた場所は、北米(ハーヴァード大学、ボストン大学、イェール大学、プリンストン大学、ミシガン大学、ペンシルヴェニア大学)、イギリス(大英博物館、英国内外聖書協会、オクスフォード大学、ケンブリッジ大学)、オーストリア(ウィーン国立博物館)、イタリア(ヴァチカン図書館、フィレンツェ・ロレンツォ図書館、ヴェネツィア・マルツィアヌス図書館)、さらにエジプト(カイロ・エジプト博物館)。この他にも先生は、ノルウェー(オスロ大学)、ドイツ(ミュンヘン大学、バイエルン州立図書館)、フランス(パリ国立図書館)などにも行き、写本を調査している。写真版でなく、実物を見ることがなぜ大事なのかということ先生は、『新約本文批評』(関西学院大学研究叢書15、新教出版社、1962年)の73-76頁「本文の調査には原写

本を参照」において丁寧に説明しているが、この原則を先生は自ら徹底して実行したのである（ちなみに、同書は今でも本文研究の良き手引きとなる書物である）。実物の調査ができない場合には、写真版が掲載された本や雑誌を入手し、丹念にチェックした上で記述がなされている。時には、文献の記載の誤りを訂正さえした跡が、遺された蔵書の中には見られる。

その作業は、先生が関西学院大学を定年退職した後も変わることなく続けられた。1991年8月に第300号を持っていったん終了となった『新約研究』も、その後はさらに私的な形で継続されており、パピルス研究の成果がそこに発表され続けた。

1992年以降、先生は病を患ったため、執筆活動も滞りがちになったのだが、入院先でも仕事は途絶えず、日中は自宅に戻って仕事をするという形を取ることもあった。その執念とも言うべき努力の成果は、『言語学大辞典 世界言語篇』（三省堂）の中にも見られるが、何よりも、『パピルス』第Ⅲ巻の原稿となって残ったのである。

* * * * *

前述した通り、私が預かっていたのは、第Ⅲ巻（パピルス46番以降）の前半部分（80番まで）のゲラ刷りと、後半部分（81番以降）の手書き原稿であった。ところが、これらを刊行委員会のメンバーに見せたところ、ゲラ刷りだと思っていた前半部分は、実は校了後の見本刷りらしいことが判明したのである。

この第Ⅲ巻用原稿をこのまま埋もれさせるわけにはいかない。刊行委員会の仕事は、原稿の整理とチェック、そして出版費用の工面であった。

前半部分の見本刷りは嶺重氏が再度チェックしてくれることになったが、心配していたのは、デジタルのファイルが見つかっていないことであった。もしファイルがなければ、文字部分は何とかなるとしても、少なくともパピルスの写真は再度はじめから揃えねばならず、その仕事は気が遠くなるほど手間がかかる。

ところが、ファイルは思わぬ形で見つかった。第Ⅰ巻と第Ⅱ巻の発行元であった大阪キリスト教書店の岸本愛司氏が手元に持っておられたのである。これで、前半部分については出版可能な状態となった。

後半部分、すなわちパピルス81番以降については、手書き原稿しか残っていなかったもので、これをデジタル化する作業が必要となった。ギリシャ文字や写本記号が満載の原稿を、手書きのまま印刷所に渡すと、作業の負担が膨大となり、費用も時間もかかる。そして、校正が大変である。そこで、手書き原稿をチェックしながらワード形式のファイルにしていく作業を始めることにした（実は、Ⅰ・Ⅱ巻の印刷は、西宮市にあった「シャローム工房」でなされている。工房主の木原栄示氏〔故人〕はすぐれた技術の持ち主で、蛭沼先生の手書き原稿を正確に読み取り、先生の求める通りに組版できる貴重な存在であったが、惜しいことに、蛭沼先生の没後しばらくしてから他界された。木原氏が存命であれば、今回の作業もはるかに容易だったに違いない。本文研究のような特殊な分野の原稿を意のままに組版できる印刷所は、特に関西ではほとんど見つからないのが現状である）。

蛭沼先生が遺した原稿は、パピルス100番までのものであった。先生が亡くなられた2001年までに、パピルスは116番まで発表されていたので、おそらく先生もご存知だったであろう（現在は126番まで発表されている）。しかし、101番以降を調査し、原稿化する時間はもはや先生には残されていなかったのである。81-101番の間にも、原稿が抜けているパピルスがある（83、84、96、97、99番）。おそらく、これから手をつける予定だったのであろう。

推測するに、パピルス100番が先生の最後の原稿なのではないだろうか。パピルス100番についての記述は、写真版のコピーも含め、『新約研究』誌用に特注された原稿用紙（36字×15行）16枚になるが、文字に震えや乱れが多く見られる他、誤記が散見される。とくに、参照した資料の中にある、「ヨハネ福音書」を示す略号 J (=Johannes) を「ヤコブの手紙」 (=Jacobus) と取り違

えて記述している部分など、通常の先生のお仕事からは考えられないものである。前述の通り、最晩年の先生は、入院していた病院から日中は自宅に戻って数時間作業をし、また病院に帰るという仕方仕事で仕事を続け、病院のベッドの上で作業することもあった。この原稿は、そのような非常事態の中で書かれたものであることが窺われる。先生は文字通り、最後の最後までパピルスと取り組まれたのである。



【主を亡くした書齋】

『新約研究』誌にいったん掲載したものも含めて、すべての原稿には繰り返し訂正や加筆が施されている。膨大な量の書き込みがなされた原稿用紙を見ただけで圧倒されてしまうほどである。これを解読し、入力していく作業はなかなか捗らなかった。ようやく全ての入力を終えた後、最初から読み直してみると、打ち間違いが次々に見つかる。私の仕事は、まさに筆耕（写本家、とも言ったりするが、先生はこの呼称を嫌っておられたようである）のそれだったのだが、写本作成者としては落第である。

文字原稿の入力と並んで、写真版入手の仕事も進めねばならない。後半部分については、パピルスの写真版ファイルは残されておらず、通常の白黒コピーが原稿に貼り付けてあるだけである。少なくとも、写真版が掲載された雑誌や書籍を手に入れる必要がある。

関西学院大学図書館の他、京都大学文学研究科図書館にも足を運び、写真版を揃える作業は進められた。場合によっては、海外から書籍を購入する必要もあったし、もはや入手が不可能なものもあった。しかし、一部を除いて写真版は何とか揃えることができた。インターネットで公開されている写真版も近年は増えている。入手にご協力くださった方々にはこの場を借りて心からお礼申し上げたい。

* * * * *

この関連で触れておきたいのが、「蛭沼文庫」の存在である。先生の蔵書の一部が、神戸海星女子学院大学図書館と関西学院大学神学部を集められ、それぞれ図書番号・請求記号を付した上で「蛭沼文庫」として保管されている。いずれの「文庫」にも、本文研究にとって重要な書籍が少なくない。前者はまだ OPAC 等での検索ができないようだが、今後の活用のために、ぜひネット上でのリスト公開をお願いしたい。

* * * * *

最後に、しかし一番重要なことだが、『パピルス』の出版には費用がかかる。キリスト教関係、まして本文研究という、日本ではキリスト教徒にすら注目されることの少ない分野の書籍であれば、売れ行きも期待できないので、商業ベースには乗らない。Ⅰ・Ⅱ巻は大阪キリスト教書店から発行されたが、蛭沼先生は多額の出版費用を自弁しておられる。今回の出版も同様に、費用の自己負担は避けられない。そこで刊行委員会としては、これを募金という形で賄うことにした。出版は、当初予定していた大阪キリスト教書店にお願いできなくなったので、新教出版社に依頼したところ、快く引き受けていただけた。そして、目標額を 120 万円として、出版諸経費の募金を始めることになったのである。

募金に際しては、本当に多くの方々からお支えをいただいて今日に至っている。関西学院広報室は、学院ウェブサイトの中にこの募金に関する詳しいページを早々に設けて下さった (<http://www.kwansei.ac.jp/Contents?cnid=6727>) 他、『K.G. TODAY』誌 2009 年 8 月号にもニュースとして掲載して下さった。募金第 1 号は、『K.G. TODAY』を見たという学内教員の方からであった。募金は、関西学院の関係者、蛭沼先生の関係者が主な頼りであったので、広報室が素早く、好意的に支援して下さいたことは本当にありがたかった。

卒業生へのインパクトが特に強かったと思われるのが、冒頭に記した『朝日新聞』の記事である。広島にいる私はすぐに記事を見ることができなかったのだが、掲載された日の朝、高校時代の親友が直ちに PDF 化して送ってくれた。記事を見た方から問い合わせや募金が相次ぎ、新聞の力を改めて認識した次第である。記事掲載のためご尽力下さった方々に改めてお礼を申し上げたい。

募金呼びかけ人に、杉原左右一学長、山内一郎前理事長がなって下さったことは学内への大きなアピールとなった。また、荒井猷氏（東京大学・恵泉女学園大学名誉教授、学士院会員）、土戸清氏（東北学院大学名誉教授、日本新約学会前会長）、津村春英氏（大阪キリスト教短期大学学長、関西新約聖書学会会長）といった、指導的立場の新約聖書学者がお名前を連ねて下さったおかげで、関西学院関係以外の方々からも募金を頂戴することができた。吉岡治郎氏（神戸海星女子学院大学名誉教授）は、言語学方面の蛭沼門下であり、蛭沼先生の関係者の方々に広く呼びかけて下さった（上述した、神戸海星女子学院大学における「蛭沼文庫」の設置も吉岡氏のご尽力による）。募金者の大半は、蛭沼先生や本文研究と直接の関係を持ってはいないにもかかわらず、この計画に温かい理解を示し、ご支援を下さった方々である。募金者のリストを見るたびに、感謝の思いで胸が熱くなる。

* * * * *



ここまで事を大きくしておいて、今さらという感じもするが、天国の蛭沼先生はこの成り行きを見て、喜んで下さっているであろうか。「人間は有名になったらお仕舞で、無名であって、有名人が逆立ちしても出来ないような重要な仕事を陰でこつこつと作業してゆくことこそ、生き甲斐のある真の人生と考える」（『同道精進』9頁）先生を、ウェブサイトや新聞記事で広く、写真までつけて紹介してしまった。まして、本文研究のまともな弟子でもなかった自分に、先生の貴重な原稿を編集したり、出版したりする

【大阪言語研究会-1988-】 資格があったのかという思いが、事あるごとに込み上げてくる。

しかし先生なら、優しく頷きながら、「まあやっpegらんさい」と言って下さったような気もする。もしそれが、自分の厚かましい願望でなかったとしたら幸いである。また、出来ることであれば、第三巻に収録されなかったパピルス 83、84、96、97、99 番、そして 101 番以降をまとめて「補遺」として出版したい。先生の水準に達することなど望むべくもないし、その道程はまだ遠いけれども、先生が「新約原典研究」のクラスで教えてくださったことを思い出しながら（蛭沼先生の授業でとったノートや戴いたプリント類は保存してある）、本文研究の学びを深めていければと思う。

（広島大学大学院教授）

*写真（3頁を除く）は、神戸薬科大学教授の田中研治先生（4頁の写真左、右は教育学部教授の山本伸也先生）よりご提供いただきました。ご協力に感謝します。

蛭沼寿雄『新約本文のパピルス』第三巻、新教出版社より 2010 年前半に公刊予定。
募金に関するお問い合わせは学院史編纂室池田までお願いします。詳細はインターネットでもご覧いただけます（<http://www.kwansei.ac.jp/Contents?cnid=6727>）。

学院史編纂室便り No. 30 (2009年11月25日)

関西学院学院史編纂室

T 662-8501 西宮市上ヶ原一番町1-155

TEL : 0798-54-6022 FAX : 0798-54-6462

<http://www.kwansei.ac.jp/gakuinshi/ARCHIVES.htm>